



F-SOAIP（生活支援記録法）とは、多職種協働によるマイクロ・メゾ・マクロレベルの実践過程において、生活モデルの視点から、当事者ニーズや観察、支援の根拠、働きかけと当事者の反応等を「F（焦点）」「S（主観的情報・利用者の言葉等）」「O（客観的情報）」「A（アセスメント・考えたこと）」「I（介入・対応したこと）」「P（今後の予定）」の項目で可視化し、PDC Aサイクルに多面的効果を生むリフレクティブな経過記録の方法。

今回は、学習療法を取り入れて在宅復帰支援を行っている老人保健施設の事例を紹介します。F-SOAIPによる記録に切り替えたことにより本人の意思を多職種で共有できるようになり、LIFEとの関係、ケアプランやリハビリの目標設定が明確になるなど支援内容も大きく変わったといえます。

F-SOAIPで利用者の S[主観的情報]にカスタマイズしたケアプラン展開へ

医療法人 信和会 介護老人保健施設和光園 事務長 吹田カズエ
執筆協力者:介護支援専門員・介護部・リハビリ課・栄養課

はじめに

当施設は、学習療法、機能訓練、生活リハビリの3本柱のPDC Aを回し、在宅復帰と在宅療養に向けて自立支援を行っている超強化型老健である。又、公益社団法人全国老人保健施設協会の認知症専門実技修得コースの実地研修施設でもある。

当施設では、これら3本柱を中心とした和光園研究発表会を、例年全国から

の参加者も得て100名を超える規模で開催している。

なお、学習療法とは、(株)公文教育研究会学習療法センターのプログラム（読み書き・計算・数字並べ、コミュニケーションを週3回20分程度実施）を使用し、脳の活性化を行うものである。

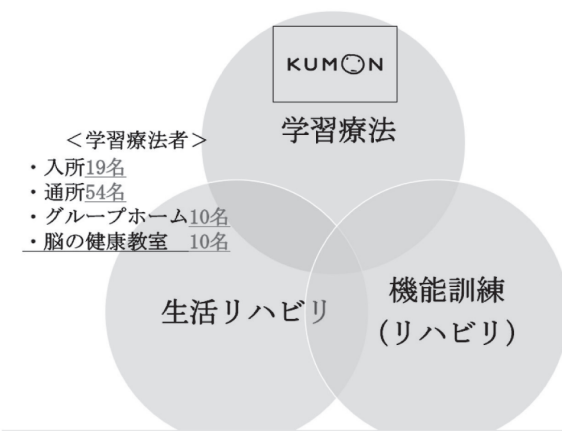
学習療法とケース検討会で F-SOAIPの活用

F-SOAIP導入の契機は、大分県

介護支援専門員協会による研修案内を見て、利用者の声（主観的情報）に焦点を置いたケアプラン展開をするには、この記録方法しかないと考え、当施設と同法人認知症対応型グループホームの介護支援専門員（部署管理者を含む）複数名で参加したことからである。参加した看護職員で介護支援専門員資格を有する職員は抵抗なく記録ができたが、施設全体での記録として定着するには及ばずコロナ禍となった。

当施設のケアプランは、優先順位を、①主疾患による生命維持へのプラン、②リハビリテーション計画書の訓練内容を活かした生活リハビリプラン、③ご褒美プラン（意欲向上を引き出せるプラン）とし、特にLIFEへのデータ提出の加算導入時から、リハビリ課が行っている機能訓練を活かし生活リハビリに重点を置いたケアプラン展開を行っている。このことからF-SOAIPによる各専門職種の記録が重要となった。

2021年のコロナ禍で面会制限がある中、同敷地内で90名前後のご利用者



学習療法・生活リハビリ・機能訓練を3本柱にして、障害の状況を見極めながら段階的自立支援実践